



浄敬寺だより

じょうきょうじ

発行日 令和七年一月一日 第四号



年末法話会



有縁講



秋彼岸



2024 年後半
記録写真



三条別院お取越報恩講



【法語】

しょうぎ

たとえ正義たりとも、しげからんことをば

ちようじ

よしそろう

せけん

ぎ

停止すべき由候う。まして、世間の義、

ちようじそら

停止候わぬこと、しかるべからず。

いよいよ

ぞうじよう

しんじん

そらろ

弥々、増長すべきは、信心にて候う。

『蓮如上人御一代記聞書』一三四

『真宗聖典』勅一〇五二④八七九項

【意識・解説】

たとえ正しいと思うことでも、そのことに固執するのはやめなさい。言うまでもなく、世間の義に振り回されてやめられないのも、まっとうなことではありません。

ますます盛んに求めなければならないのは、信心です。

大地震が始まった二〇二四年は激動の一年でした。社会を騒がせたニュースが沢山ありましたが、中でも兵庫知事選挙に関しては、一体何が真実なのか不可解なことばかりでした。現代は情報を知るためのツールが沢山あります。パソコンやスマホを使うインターネットからの情報は、幸か不幸かAI機能のお陰で、一度調べたこととの関連情報が集まってきます。一見便利なのですが、あつという間に人間の思考を偏らせる恐ろしさがあります。

『信心』とは、如来からの呼びかけに^{こた}応えていく姿です。そこにはどこまでも自分自信を問う厳しい姿勢が共存しています。身近な喧嘩も、国家間の戦争も、裏を返せば正義と正義のぶつかり合いです。自分の正義に固執するのはやめなさい...と言われた蓮如聖人のおこころを思った二〇二四年でした。

☆巻頭法話☆

昨年は元旦の能登半島地震で始まり、その後やはり九月の能登半島豪雨など、日本列島は度重なる災害にみまわれました。被災した方々には本当に辛い日々を送っておられることと思います。一日も早い復興を祈らずにはおられません。

昨年、暮れも押し迫った十二月八日に、私が大谷大学時代、大変お世話になった先生がお浄土に還られました。大学に入学した時のクラス担任の先生でもあり、私が所属した部活動の顧問でもあられました。そんなご縁もあり、平成三年の本堂落慶法要には記念法話のご講師としてもおいでいただきました。人間には出遇いがあれば別れもあることは自明のことではあります。年々こうしてお世話になった方々とのお別れが増えてくるのは寂しい限りです。その先生が大谷大学を退職される時、記念に色紙を書いて下さいました。書かれた言葉は「水滴石穿（すいてきせきせん）」というものでした。これをいただいた時、大谷大学教授として退職されるのだから、何か經典の言葉を書いてくだされば良いのに、などと思っただけです。そんなわけでその色紙を額に入れて飾るわけでもなく、ずっと机の中にしまい込んでいました。この度、先生の御命終を知り、改めてそ

の色紙を出してみました。「水滴りて石を穿つ」と読み下しますが、先生が敢えて經典の言葉ではなく、座右の銘的な四字熟語の言葉を書いて下さったことの意味を改めて考えさせられたことでした。恐らくこの言葉は先生が生きて来られた上ですと心してきたことであると同時に、私が寺の住職としてこれから決めて忘れてはならないことを分かり易く書いて下さったものと感じたことでした。何でも便利になった現代社会ではありますが、その中で様々なひずみも生じてきています。一步一步進んでいかなくてはならないと分かっていても、性急な結果を求めて苦しんでいるのも自分の姿です。一滴一滴の水が最後には硬い石にさえも穴を空けるように、力の無い自分であつても努力を続ければ最後には何かを成し遂げられるのだ。このことを先生が身を賭して私に教えてくださったと改めて感じたことでした。

昨年はご門徒の皆様のお力添えで念願の庫裡改修工事を終えることができました。この機会に百年以上も浄敬寺を陰で支えてくれた小舎裏の梁も見ることが出来ました。耐震対策も行いましたので地震に対しても安心出来るかと思えます。三年計画の事業です。まだまだ最終報告は出来ませんが、お陰様で本当に有難く使わせていただいております。春の彼岸にはお齋を再開出来ると坊守も張り切っております。

ます。この工事をご縁に、浄敬寺がますます皆様の
お寺となりますよう努めてまいります。寺の仏事に
は是非とも多くの皆様にお参りいただきまますようお
願い申し上げます。 合掌

(住 職)



☆庫裡便り

浄敬寺の日々の出来事から
坊守の所感をお伝えします。



◎庫裡改修工事について

四月早々に始まった庫裡改修工事も無事に終わりました。工事
関係者の方々には大変難儀をおかけしました。感謝いたします。
この大改修工事にご理解、ご支援をいただいた皆様に寺族一同心
より御礼申し上げます。お陰様で歴史ある庫裡を次の世代に伝え
ることができました。

◎佐渡の赤玉石

御門徒の方より、佐渡の赤玉石を御寄進いた
だきました。随分重く、男性三人の力でようや
く玄関に据え置きました。



◎改修工事後の年中行事について

十二月の年末法話会は改修された庫裡を会場にしました。「暖
かかった」と感想をいただきました。三月の春彼岸からお齋も再
開の予定です。参詣をお待ちしております。

◎准坊守のこと

十月十七日、柏崎刈羽同朋の会法話会の講師と
して、准坊守が「念仏申すべきもの」と題した法
話をさせていただきました。大勢の方から聴聞し
ていただき有難うございました。大学卒業後、自
坊に帰って二十年余りになります。ご門徒の
方々や多くの先生方にお育ていただいて、悩み多い子育ても全て
お念仏に包まれていると感ずる内容でした。自坊での定例会(歎
異抄をよむ会)にも是非ご参加ください。

◎名工小川由廣さんのこと

境内に入った直ぐの樺の木の前には以前親鸞聖人の石像があり
ました。本堂建立後中庭に移しましたが、中越沖地震で倒れ、足
が折れてしまったまま立てておりました。この度の庫裡改修工事
のため、今はまだ中庭の隅に寝させたままになっていますが、こ
の親鸞聖人像とお檀家である小川家のお墓の観音様は「ひげのお
じいさん」こと小川由廣さんの作品であり、この度春口敏栄さん
がまとめられた小川由廣さんのライオン像の本にも紹介されてい
ます。寺にもご寄進いただきましたので是非ご
覧ください。柏崎市内では、柏崎神社、松雲山
荘、悪田稻荷神社のライオン像が有名ですが、
市内には十一、市外には四点のライオン像が
確認されているそうです。上越市「ライオン像の
ある館」にも行ってみたいですね。



☆二〇二四年後半を振り返って

◎秋彼岸（お中日・九月二十二日）法話 当院

当院から法話の後、同朋唱和にて勤行。庫裡改修工事の完了目前でしたが、この度は、おときはお弁当にてお持ち帰りとさせて頂きました。

春のお彼岸には着工前の庫裡を視ていただきましたが、この度は改修工事完了目前の庫裡をご覧いただきました。



◎三条別院お取り越し報恩講団体参拝（十一月八日）

四日間の報恩講の最終日、御満座をお参りしました。

本山からお鍵役をお迎えした荘厳な入楽法要に会い、おとぎの後、推進員の方による諸殿案内があり、ご法話は「三河すーぱー絵解き座」の井野優介氏による絵解き法話でした。御絵伝に描かれた内容を解説されながら、親鸞聖人の御生涯をお話しいただきました。御満座には『恩徳讃』の歌になっている御和讃「如来大悲の恩徳は」を唱和しますが、この御和讃の後に続く『愚禿悲嘆述懐和讃』の内容や『お浚い（おさらい）』のお勤めについて、これで終わったのではなく、またここから一年が始まっていくのだ：ということをお話しいただきました。



◎有縁講（十一月十二〜十三日）

今年は無急遽、准坊守・晴香が参加させていただきました。居多ヶ浜記念堂と光源寺様の上越の御旧跡を参拝・見学後に赤倉ホテルへ。昼食をいただいてからお勤めとご法話のあと、温泉に浸かり、ゆっくりとした時間を過ごしました。二日目はりんご狩りの後、葛飾北斎や俳人小林一茶、戦国武将・福島正則ゆかりの古寺・岩松院を参拝し、小布施を散策の後、帰路につききました。

末法話会（十二月十五日） 法話 田澤 一明 師 「聖道の慈悲・浄土の慈悲 — 『歎異抄』第四章に学ぶ —」

田澤先生は先ず「慈悲とは、誰の心根にもある願いである」と説明されました。親鸞聖人は「聖道の慈悲」と「浄土の慈悲」があると語られたのだと、『歎異抄』の筆者である唯円は第四章に綴っています。

「聖道の慈悲」とは「ものを憐み愛しみ育む」こと。しかし「その思いによる救済は、成就することがない」と説かれています。先生ご自身も、三十年前に阪神淡路大震災でボランティア活動を経験された際に、人が人を憐み、被災者に良かれと思つて行うこと（聖道の慈悲）は、持続が困難であること。また、こちらの願いと被災者の願いには相違があり、救済が成就することがないということを感じられたそうです。親鸞聖人も関東の佐貫で「三部経千部読誦」の雨乞いを実行した時、思い知らされたのだろうと話されました。そのことについては、お話の最後で野田正彰氏の「ボランティアの真の仕事は、被災者一人ひとりの内に人間の尊厳を見出すことである。」という言葉を紹介され、これが真宗のボランティアの真意ではないかと話されました。

親鸞聖人は、「聖道の慈悲」に対し「浄土の慈悲」とは、阿弥陀様が衆生にお念仏申させて、全ての衆生を救い取るころ（大慈悲心）であると云われます。だからこそ、お念仏申すことが衆生の救いであるのです。田澤先生は学生時代、「分かつて、分からんでも念仏申せ」と言われたそうです。阿弥陀如来の本願（選ばず・嫌わず・見捨てずのおこころ）が、私たちに念仏申せというならば、こちらの思いを挟まずに、ただ念仏するしかない、ということです。そのお念仏の中で、私たちの「分かる・分からん」、「善いか・悪いか」、「好きか・嫌いか」の分別心が頭わになり、その自覚が、私たちが主体性をもって生きる道となるのです。

お念仏申すことだけが、阿弥陀様の全ての者を救う大慈悲心に触れることなのです。お念仏申し、そのお念仏の中で生活をいただいで行くのが、真宗門徒なのだと思います、とお話いただきました。

（当院・記）

☆二〇二五年前半の行事予定（参加お申込み不要）

一月一日 修正会勤行 午前六時より本堂
一月一～二日 年始参

*真宗門徒の一年は御本尊へのお参りから始めましょう

一月十八日（土）『歎異抄』をよむ会 午前九時より

二月 八日（土）『歎異抄』をよむ会 午前九時より

三月 八日（土）『歎異抄』をよむ会 午前九時より

三月十五日（土）第十組同朋会報恩講 於産業文化会館

*法話 近松 誉氏ただし（真宗本廟本廟部長）

*参詣については別途ご案内いたします。合唱団として
ご参加いただける方を随時募集しております。

三月十七～二十三日 春彼岸

お中日二十日（春分の日）午前十時半～法話・勤行・お齋

四月十二日（土）『歎異抄』をよむ会 午前九時より

五月十日（土）報恩講お引き上げ準備会 午後一時より

*仏具のお磨き・境内清掃 等にご協力ください

五月十九日（火）報恩講お引き上げ 午前十時より

*法話 今泉 温資 師（新潟市）

勤行後おとぎがあります

六月七日（土）『歎異抄』をよむ会 午前九時より

*第二土曜日がえんま市と重なるため変更します

六月二十一日（土）仏教文化講演会 於 アルフォーレ

*珠洲焼陶芸家 篠原 敬氏

（石川県珠洲市 游戲窯（ゆげがま））

七月六日（日）夏の法話会 午後一時半～四時頃

*講師 佐野明弘氏

（石川県加賀市光闡坊住持・大谷専修学院院長）

七月十四・十五日（日・月）盆参会（盆内）午前十時半～

*法話・勤行後、両日ともおとぎがあります

八月三日（日）夏休みお楽しみ会（子ども会）午後四時～

八月十三～十六日（水～土）お盆

*十三日午前六時～勤行

ごあんない

☆おてらヨガ：（ミニ法話×ヨガ）

- ・毎月第三土曜日午前十時より約一時間
- ・参加費千円
- ・インストラクター 砂長谷真梨子さん

☆定例法話会：『歎異抄』をよむ会（シーズンⅡ）ご案内
昨年、第三章までを解説しました。途中からのご参加のでも
一緒に学べます。ご都合に合わせてぜひご参加ください。

- ・基本的に第二土曜日午前九時より

- ・内容 『歎異抄』の解説、正信偈のお勤め

（終了後、ささやかな茶話会あり）

- ・持ち物 赤本・念珠・『歎異抄』のテキスト



☆真宗門徒の豆知識

浄土真宗の教えについての疑問やお参りしていただき、不思議に思うこと。また、こんな時どうしたらいいの?とご質問をいただくことがあります。皆さんと共有したいと思います。

Q1、『僧侶のお衣の色に意味はあるの?』

A、お衣にも、普段着があれば晴着もあります。

平日か法要か等、法要の重さや役割でも変わります。

お衣には様々な形や色があるのにお気付きかと思えます。最も着用頻度の高いお衣「間衣まぎ&輪袈裟りんげさ」は僧侶の普段着。そして「直綴しきとつ&墨袈裟すみげさ」は僧侶の一番基本の装束です。得度して僧侶になり最初に身に着ける装束であり、平日のお朝事の装束でもあります。「平日」と「法要」、またその法要にも軽重があり、それに伴って僧侶が身につける装束も変わります。

真実の教えに、目で見て耳で聞いて出会う場所が閻法の道場である本堂です。本堂の内陣と外陣では表現方法の違いから、その座に着く僧侶の役割も異なります。内陣は、仏様が法を説き、それを聞いておられる菩薩方の姿、お浄土の世界を視覚的に表現しているのです。真実の教えに遇ったなら個性そのままに輝くことを表して僧侶のお衣もカラフルです。外陣の僧侶は、私たちに届けられた教えを人の声で表現し、聴覚に届ける役割をしていますので、基本的に同じ色のお衣で統一されています。

以上は基本的なことで、それぞれのお寺の仏事や葬儀においてはこの限りではなく、臨機応変な対応をしている場合もあると思います。お袈裟のサイズや色彩などに違いがあり、場に応じて使い分けられています。お寺の歴史や文化などによって、お衣の色や形はさまざまです。お寺の歴史や文化などによって、お衣の色や形はさまざまです。お寺の歴史や文化などによって、お衣の色や形はさまざまです。

ちよっくら
Q&A



Q2、『亡くなった母が散骨を希望していたのだけど...』

A、亡くなられたお母様は、人が生きる上で向き合わなきゃいけない四苦八苦を教えてくださいました。ありがとうございます。好き嫌いや自分の都合を離れて仏に成られたのだから、あまりこだわらずに、お参りしやすい方法を選んでよいのではないのでしょうか。

これは私が中学校に講師としてお勤めさせてもらった時に知り合った友人の話です。質問の内容をよくよく聞いてみたところ、お母様は嫁ぎ先の御両親や親戚関係に大変苦労したので、せめてお墓は別がいい...と言いつつ亡くなられたとのことでした。そして友人は続けて、「散骨してしまつたら、大事な母を思いだすきっかけが無くなつてしまう。いくら母の希望とはいえ、踏ん切りがつかない。」と話してくれました。

今までの付き合いの中で、彼女が仏像を拝観するお寺巡りが大好きで、毎年京都旅行をしていることは知っていたので、一緒に色々話をしながら、大谷祖廟はどうだろうか?と提案しました。

大谷祖廟は、宗祖親鸞聖人の御廟所(御遺骨のあるところ)です。私たち真宗門徒は、遺骨の一部を親鸞聖人の近くに収める分骨をしてきました。このこと背景には、『親鸞聖人の出遇ったお念仏の教えにあなたもまた出遇ってほしい』という、故人から遺族への最後の願いが込められているのです。『亡骸は鴨川にまいてくれ』と言われた親鸞聖人。この言葉の真意や、それでも御廟所を建てて護持してきた門弟たちの思いを改めて考えさせられたことでした。

さて、友人がその後どうしたかという話ですが、『ご家庭が真宗大谷派の門徒だったこともあり、色々考えた末に大谷祖廟への納骨を決めました。お父様と一緒に納骨に行き、その次は一人で、その次はお友達と一緒にお参りしてきたそうで、大好きな京都お寺巡りのルートには、必ず大谷祖廟への参拝が入るそうです。『私も、もの時はココがいいなあ...』とのことでした。

大谷祖廟への納骨をお考えの方は、お気軽にご相談ください。



☆浄敬寺庫裡改修工事について

二〇二四年四月一日に着工し、九月二十六日に引き渡しをしていた
 できました

今号では、夏以降の工事が完了した写真をお届けします。工事の進捗状況につきましては、浄敬寺だより四十三号に詳細を載せさせていただきます。合わせてぜひご覧ください。



☆9月26日
 引き渡し
 ☆総代世話人会議

改修工事
 ココをご覧ください！



☆年中行事の際におとき会場となる広間にはエアコンを取り付けていただきました
 ☆耐震のため、壁が増えました

☆旧内陣だった座敷は中央を床の間にしし、天井は格天井（ごうてんじょう）にさせていただきました
 ☆変則的な形だった部屋でしたが、一部削って廊下に
 ☆旧内陣の変則的なお部屋を削ったスペースは、コピー機や本棚を設置できる事務室になりました
 ☆掃除やお花を生ける際に使っていた水盤を使い勝手よくさせていただきました
 ☆法衣を収納・改着用のお部屋ができました
 ☆トイレ増改築で使いやすくなりました



☆当院の仏教名言集 第三十七回

『迷惑』

以前勤めていたお寺のご門徒の家でお参りが終わった後、その家のお婆さんとお話をしていた時のことです。お婆さんは「この年になっても身体に不自由がなく、誰にも迷惑を掛けていません」と話されました。それを聞いていた看護師の娘さんがかさず「誰の迷惑も掛けてないと思っっている自体が迷惑な人だ」と言いました。お婆さんは、絶句してしまいました。人は、精神的にも社会的にも独立者となり、自分を確立しようとしています。「一人で何でもできるようになったら一人前」という言葉があるくらいです。そのお婆さんも、年は取っても今も何でもできている、と自分を認めて欲しかったのです。ですが、気づかないところで娘さんがいろいろお世話を焼いていたようです。「迷惑」という言葉は仏教用語で「悟り」の反意語とされています。

「迷惑」とは、煩惱によって惑い迷わされることを意味します。いわば、人間のことです。親鸞聖人は「凡夫」と言っています。そして、そんな凡夫に阿弥陀様は、そのままの心持で我が名を称えよ、念仏申せと目をかけてくださるのである。昔、先生から「念仏者として、独立者とならん」という言葉を教えていただきました。迷惑なままで、独立者となるそれが、お念仏の利益です。

(当院)



8

☆連絡先 浄敬寺

〒945-0051

柏崎市東本町 1 - 11 - 35

TEL:0257-22-2481

FAX:0257-22-2140

Mail :

住職 tomi814@kisnet.or.jp

当院 minipapa@kisnet.or.jp

晴香 jyoukyouji222481@gmail.com

☆編集を終えて：

慌ただしく過ぎた秋、インフルエンザの大流行も、子ども達が次々と持ち込む風邪も、うまくかわしていよいよ迎えた年末に、体調を崩しました。自分の体力を「自分で過信」していた結果と、悔やみました。「信じる」ということは、自分の身の上のことだと簡単に揺らぎ、容赦なく現実はやってきます。自分の都合での思い込みですから、当然のことなのでしょうね。

親鸞聖人が仰った「信」とは、どこまでも「如来の行としての信」であると教わってきました。自分は大丈夫と思いついでいる私に、「あなたが信じているものは本当に真実のことですか？」と呼びかけ続けているのでしよう。

寺が今まで以上に聞法の道場として機能していくように、皆さんのご意見を伺いながら模索していきたいと思っています。

(晴香)



8月13日午前6時
お盆の朝